

1-1 里山とは どんなところ？

人が関わってできた自然

里山は、人ともにある自然です。漠然と人との関わりが深い山を指すこともありですが、もう少し丁寧にみると、人が生活や産業、特に農業を行うために作り替え、維持・管理・利用してきた自然環境のことです（写真1-1、1-2）。

里山には、複数の異なった特徴を持つ土地が集まっています。集落の屋敷林^{やしきりん}。神社・寺院などにある社寺^{しゃじ}林。田や畑などの農耕地。燃料などの供給地だった雑

用とその配置は、人が用途に合わせ、長い年月をかけて、もともとある自然を作り替えて出来上がったものです。

里山には、多くの生物が生息・生育し、人との共生関係を築いてきました。このような視点から見ると、里山は、人の活動との強い関係性を持つ独自の生態系（生き物とそれを取り巻く環境からなるシステム）として把握することもできます。このように、里山を生

態系として捉えたとき、前に記したそれぞれの土地利用は、**ビオトープ**とも呼ばれます。

ビオトープは、ドイツ語で「生き物の場」を意味します。日本では「校庭や庭などに造った生き物の住む池」といった意味で定着しつつありますが、



写真 1-2 里山へ農作業に向かう人（2000 年頃 愛知県）

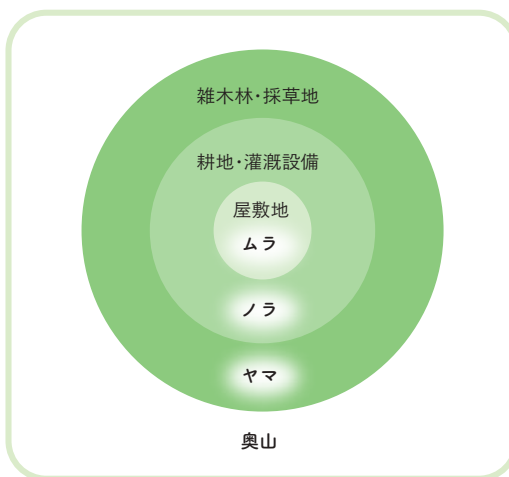


図 1-1 民俗学的にみた里山の空間配置
里山の領域はムラ・ノラ・ヤマの三重構造をなしている。

普遍的にある里山

ここでは、人が造成したかどうかにかかわらず、広く生物の暮らす空間と理解してください。

里山のお話をするとき、「里山に行ってみよう。どこにありますか」とよく聞かれます。しかし、里山は特定の場所を指す地名ではありません。人が定住し、長い間農業が行われている場所であれば、たいていそこ

木林。飼料や肥料を得ていた草^{そう}地。それらの間をめぐる小河川や用水路、ため池などの水辺も含まれます。それらの配置を民俗学における研究を参考にみると、中心に居住空間（ムラ）、その周囲に田畑など生産の空間（ノラ）があり、さらにその外側には資源採取の空間である（ヤマ）があるとされます（図 1-1）。それらのモデルは同心円状に描かれますが、実際の配置は地域や地形によって様々です。このような土地利



写真 1-1 春浅い里山の風景（2008.4.12 愛知県）

2-5

雑木林

— 燃料・肥料・
建築資材を得たところ

雑木林はどんなところ？

里山のうち、ヤマにあたる部分の代表的な景観要素として挙げられるのが、**雑木林**です（写真2-5）。人々はここから、燃料や食料、肥料や飼料、建材といった、様々な資源を得てきました。

雑木林の主たる用途は、エネルギー資源である炭や薪の生産です。その意味で、現在の油田のような場所です。切り倒した幹や枝だけでなく、例えばマツの落ち葉も掻き集めて焚き付けとしました。

所でもありました。農具の柄や、刈ったイネなどを干すための**稲架木**（写真2-6）には、雑木林の木が使われました。

雑木林から得られる食料もあります。例えば、タラ

ノキやコシアブラの新芽、

ヤマノイモなどの根、アケビ・ガマズミ・クリなどの

果実、マツタケなどのキノコ類（写真2-7）が挙げられます。これらの山

菜等は里に暮らす人々の食卓を彩ったほか、市場な

どで売ることによって貴重な現金収入にもなりました。

食料資源は、採集するだ

けでなく、栽培も行われました。例えばシイタケな

どキノコ類を栽培する際

の原木の供給源としても



写真 2-6 稲架木として利用されている雑木の材（2009.12.29 愛知県）



写真 2-7 マツ林から得られたマツタケなど食用菌類（2016.10.26 徳島県）

雑木林は重要で、かつ適切な湿度のある栽培地にもなりました。

雑木林の木を使って家を建てることもありました。

長野県北部にある築100年以上の古民家の材を調べ



写真 2-5 晩秋の雑木林（2015.12.7 神奈川県）

また、コナラなど広葉樹の落ち葉や下草は、重要な肥料となりました。刈った下草をそのまま田畑にすき込む「刈り敷き」をしたほか、熟成させて堆肥として使うこともありました。このほか、農業資材を得る場

もっと知りたい! 6

棚田は里山の 景観要素のスター

棚田は千枚田とも呼ばれ、北海道と沖縄県には少ないものの、全国に広く見られます。農林水産省は、棚田の保全活動の推進や社会への理解の浸透を図る目的で、1999年に「日本の棚田百選」を選び、2022年には改めて「つなぐ棚田遺産」（以下、棚田遺産という）として271地域の棚田を選定しました。

棚田遺産を都道府県別にみると、最も多いのが新潟県で36地域です。以下、熊本県（17地域）、長野県（15地域）、宮崎県（13地域）と続きます。都市のイメージが強い大阪府や愛知県でも、それぞれ5地域と2地域が含まれています（図2-8）。

この棚田遺産選定の背景にあるのが、2019年に制定された棚田地域振興法です。条文によると、棚田のある地域には「農産物の供給、国土の保全、水源の

涵養、生物の多様性の確保その他の自然環境の保全、良好な景観の形成、伝統文化の継承等の多面にわたる機能」があるとし、それを「国民が将来にわたってその恵沢を享受」できるよう、保全・定住・交流を促進する内容で、地域振興計画の策定や人材育成にも言及しています。

このように、水田の中でも特に棚田に特化して、地域振興と結びつけるこの法律は大変ユニークです。219で紹介したように、ため池にも「百選」と法律があります。しかし、ため池の法律はあくまで管理と防災に関するものですし、ため池を使った地域づくりも、棚田ほどの広がりはありません。一方、棚田は世間の関心もすこぶる高く、観光地としての需要もあり、現代における里山のスター的な景観要素と言えるかもしれません。

このような中で、実際に各地で棚田を活かした地域づくりが始まっています。「映え」写真が撮影できる展望台や駐車場、散策路といったハード面の整備に加

え、マルシェやどろんこ遊びといったイベントも開かれています。さらには、田植えや稲刈りを体験する権利が得られ、収穫したお米が送られてくる棚田オー

ナー制度も各地で実践され（写真2-18）、滞在型の観光客呼び込むための農家民宿も増えています。今後、一過性のブームではなく棚田への関心が継続するの、また、単なるレジャー消費の場としてだけでなく、棚田を通して広く里山の文化や生物多様性に対する社会の理解が深まってゆくのか、注目しています。

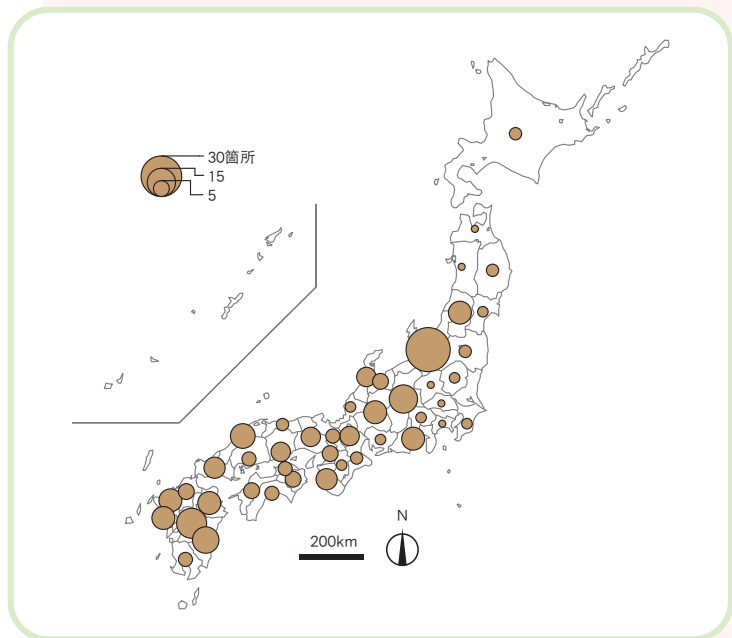


図2-8 「つなぐ棚田遺産」の都道府県別選定地域数
中部地方や九州地方に多いが、東京都・茨城県・沖縄県を除く全国から選ばれている。



写真2-18 棚田オーナー制度の行われている恵那市・坂折棚田（2024.6.15 岐阜県）

3-1 証城寺の狸囃子 —哺乳類

日本には、100種を超える陸生哺乳類が生息していますが、その多くが里山に暮らしています。

例えば、本州中央部（関東・中部・近畿周辺）の里山で見られる代表的な在来種を挙げれば、ツキノワグマ・ニホンジカ・ニホンカモシカ（写真3-1）・イノシシといった大型のもの、ニホンザル・アカギツネ・タヌキ・アナグマ・ニホンノウサギ・ニホンイタチ・ニホンリス（写真3-2）・ムササビ・アカネズミなど中・小型のものがあります。このほか、地中を主な生活地とするモグラ類、洞穴等に暮らし飛翔するコウモ

り類なども里山にはよく見られます。

ニホンオオカミやニホンカワウソなどの絶滅種も、

里山を生息域とする哺乳類でした。

ツシマヤマネコ・イリオモテヤマネコ・アマミノクロ



写真3-1 里山を利用した公園の雑木林に現れたニホンカモシカ（2022.9.18 岐阜県）

ウサギなどは、生息地が限られ、個体数も少ない絶滅危惧種ですが、これらも奥山にのみ生息しているわけではありません。これらの哺乳類は、二次林も含めて利用し、水田・畑など人里で採餌（さいじ）することもあることがわかっていきますから、里山の哺乳類に含めて差し支えないでしょう。

近年は外来の哺乳類も里山に進出しています。日本に広く分布しているものには、ハクビシン・アライグマ・ヌートリアなどが挙げられます。局地的に野生化

しているものも多く、関東南部のクリハラリス（タイワンリス）（写真3-3）やキョン（小型のシカの一種）がそうした例です。

哺乳類の多くは、地域の民話や『証城寺の狸囃子』のような童話にしばしば登場し、身近な生物の代表として親しまれてきました（もっと知りたい！⑧参照）。また、里山の資源として、食肉や毛皮を得る狩猟の対象にもなりました。一方、家禽や農作物を食害するなど被害を及ぼす存在でもあります。獣害は古くからあった人と野生生物の間にみられる軋轢（れんりく）です。しかし、近年は、個体数の増加や中山間地の人口減などによって、特に問題が顕在化しています（5-4参照）。



写真3-2 冬の雑木林で餌を探すニホンリス（2019.2.4 愛知県）



写真3-3 関東南部で野生化したクリハラリス（2014.4.6 神奈川県）

もっと
知りたい！
8

民話にみる
キツネ文化圏と
タヌキ文化圏

里山の哺乳類として、最も親

しまれている2種を挙げるなら、キツネ（写真3-4）とタヌキ（写真3-5）ではないでしょうか。いずれもイヌ科の中型哺乳類で、主に夜行性、キツネはやや動物食に偏りますが、食性は雑食です。違いもありま

5-4 クマが街に出て シカが山を 食い荒らす

野生動物との

せめぎあいの場としての里山

里山は、人の住まう領域と、獣の住まう領域のはざまにあります。また生産の場として、栄養価の高い農作物が栽培され、捕食しやすい家禽も飼育されています。その必然として、里山は誕生当初から人と野生動物がせめぎ合う場でした。獣害は今になって始まった問題ではありません（もっと知りたい！⑭参照）。にもかかわらず、里山に関連する社会問題として、



写真 5-6 雑木林に出没したニホンジカ（2023.10.2 岐阜県）



写真 5-7 湧水湿地をヌタ場として利用するイノシシの親子（2024.6.24 岐阜県）

近年とみに獣害が取り上げられています。獣害がかつてより深刻になっているからです。農林水産省の統計によると、2023年の野生鳥獣による全国の農業被害額は、約164億円にのぼります。それでも、この数値は有害鳥獣の積極的な個体数調整などの対策で抑

制された結果で、過去には200億円を大きく超えた年もありました（図5-5）。

農業被害をもたらす野生鳥獣の内訳をみると、近年はシカ（写真5-6）が最も多く、2番目がイノシシ（写真5-7）です。この2種で過半を占めています。

野生動物による被害は、農業分野にとどまりません。森林では、シカが下草を食いつくし、イノシシは地面を掘り返します。その結果、林床植生が荒廃して土砂災害のリスクが増している場所もあります（写真5-8）。また、ノウサギによる樹木苗への被害も見られます。住宅地でも、クマの出没による人的被害がしばしば発生しています。

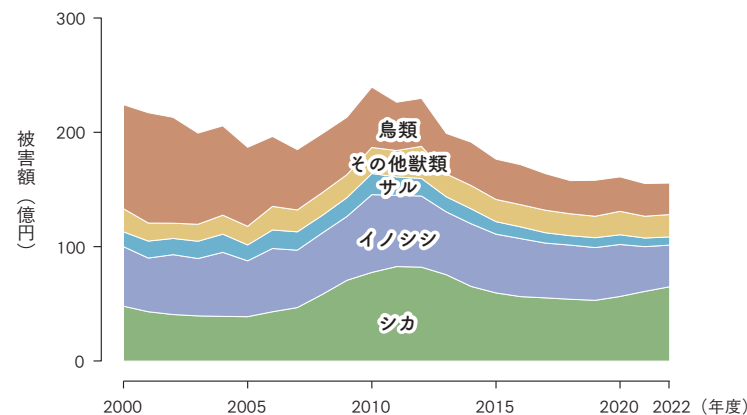


図 5-5 鳥獣による全国の農作物被害額の推移
国内の獣害被害は、シカ・イノシシを中心に100億円以上にのぼる。

7-1 楽しく学べる 里山を探そう

訪ねやすい都市近郊の公園や緑地

ここまで、里山を知るための様々な事例を紹介してきました。でも、百聞は一見に如かず、です。第7章では、実際に身近な場所の里山に出かけてみましょう。とはいえ、もしあなたが都市に住んでいるのであれば、里山を訪ねてみようと思いついても、どこに行けばよいか戸惑ってしまうかもしれませんね。その場合は、まず郊外の丘陵地を利用した公園や緑地に行くことをお勧めします。



写真 7-1 里山を利用した都市公園 (2015.12.7 神奈川県)



写真 7-2 里山を利用した公園の歩きやすい道 (2014.12.22 神奈川県)

憩いの場ともなっているはず。公園・緑地によっては、稲作体験のできる水田や市民農園を併設していて、ヤマだけでなくノラやムラの雰囲気を感じられる場所もあるかもしれません。

ただ、公園・緑地の里山は、ある意味で、博物館に

あるはく製や押し葉標本のようなものです。周囲の自然環境や、人々の暮らしから切り離されて保存された場所ということです。もちろん、地域の生態系の豊かさにとって重要な場ではありますが、里山を学ぶ場という点では、あくまでも、その姿や形を理解するための入口に過ぎません。

一方、そのような場所だからこそのメリットもあります。後述する「生きた里山」は、必ずしも万人に向けた整備をしているわけではありません。険しく歩きにくい道もあります。高齢の方や、体の不自由な方が訪ねるのは難しいこともあるでしょう。しかし、公園・緑地の園路の一部は、近年、車いすやベビーカー

東京・名古屋・大阪といった大都市を含めて、日本の都市の多くは、盆地や沖積平野に位置しています。その周囲はたいがい起伏に富んだ丘陵地に囲まれ、かつて一帯は里山として利用されてきました。こうした地域は、戦後の都市の膨張によって、都市的土地利用の波に飲み込まれてゆきます（5・3参照）。しかし、しばしばその一部が、公園や緑地として整備され、都市住民の憩いの場として活用されています（写真7-1）。特に、「森林公園」「○○の森」といった名称の公園・緑地は、かつて周囲が里山であった可能性が高い場所です。

こうした公園・緑地を訪ねると、中央部にはスポーツのできる施設や遊具のある広場があり、そこから人々の賑やかな歓声が聞こえてきます。里山の気配は、あまり感じられません。しかし、そこから森林に伸びる、静かな細い道を少し進んでみましょう（写真7-2）。例えば関東近郊などの暖温带ならば、コナラ・クヌギ・アカマツなどの里山の雑木と多様な低木・下草が迎えてくれるでしょう。昆虫や鳥など、動物の貴重な